

ありがとう」と緊張の中にもうれしそうに、又皆からの拍手に照れながら、各自、自分らしい歩き方で席につく。卒園記念には、自分の描いた絵を表紙にしたアルバムを作り贈られる。園生活の思い出の写真をはって、大切に皆持っているようだ。お母様の挨拶も代表の方にお願いするのだが、毎年決ったようなことばになってしまいうので、今年は、卒園の時にお母様方の気持ちを書き文章にして頂き文集にしているものの中から、何人かの方に読んで頂く事を考えている。特別工夫してこんな事を、と云うのもない私の園の卒園式だが、春の花に囲まれ、暖かい雰囲気、日頃の保育の姿がそのまま見えるような最後の日にしたいと願っている。

(神奈川県・松ヶ丘幼児園)



私の園の卒業式

水藤 昭子

私達の保育園は、宗教法人(日本聖公会中部教区上田聖ミカエル及諸天使教会)で、教会の敷地にある古い建物を利用して、四〇年の歴史を持っています。

市の中央部にあり、隣接して幼稚園や保育園が五つ程固まって在りますので、思い切って、九〇名の定員を、六〇名にいたしました。人数が少なくなりますと、今までとはまた異なった生活が生まれてくると思われませんが、現在までの卒業式は、大体次のとおりです。

子供達がいただく証書には、

“あなたは、神さまのみまもりのもとに、本園にて□年間、保育を受けたことを証します”

と、記されていて、写真がはってあります。それは縦一六糎と、横二六糎の小型の物で、厚いしっかりした紙質で出来ています。写真はその左端にはってあるのですが、その写真は保母が写すものですから、その子供の表

情の一番すばらしいものの一枚を探し出すために、何枚も写すことになってしまいます。

式次第は、聖歌とお祈りとみことばによるもので、毎年殆んど同じです。

式の練習は、毎日の保育の中で、順次に身につけてゆくものだと思います。歩き方も、物を受ける時の態度、人とお話をする時の態度、それらは在園中に、生活の中で身につけてゆくべきことなので、練習を機会に、もう一度確かめてみる事が出来ます。この式の中で、ローソクに点火するということが、一番緊張する場面です。

ともされたローソクの光をみまもりながら、まっすぐに目的のところまで歩いてゆく、ということは、子供にとっては、とても大変なことと思われましますので、自然な行動となる為に、三月になると、一週に一度の割で、練習をします。

これらの内容をもつ卒業式の案内状は、毎年似たりよつたりなのですが、昨年度のものを記してみますと左の通りです。

*

*

暖かな春の日射しに、垣根の葎が開花し子供達の喜びの音が、庭いっぱいに溢れる今日この頃でございます。

この庭で四年、或いは三年、二年、一年と、期間の差こそあれ、共に主を讃美しつつ成長してまいりました子供達が三〇名、小学校へと出かけてゆく日も近づいてまいりました。

子供たちは、どこにあっても、平和を創り出してゆくことに心を用い、光を放って進んでゆくことと思えます。その歩みが、確かなものとされ、日々を過ごしてゆけますように、神のみもとと平安をお祈りしております。

この子等の成長を祝い、別紙のように卒業式をとりおこないますので、どうぞ皆さま御出席くださいませ。

*

*

また、卒業生氏名と、保育年数とを記した式次第も、すべて、園で印刷した質素なものです。

卒業式では、二才三才の子供達が喜びを感じるよう

に、祝いの気分の中で成長してゆく事が出来、喜んで参加出来るように心を配ります。

そこで、それより十日程前に卒業生だけで、父母を招待して「卒業感謝礼拝と劇」という特別な行事を、一日もうけることにしました。それからすでに十五年になるでしょうが、一番最初に、これを共に計画した子供達は、現在二十一才になります。(大学三年)

最初は、簡単な童話劇でしたが、七年前から「十字架のみちゆきと復活」という大きな劇になりました。これは現在六年生になる子供達の願いから始まったものですが、年毎に子供達の期待が大きくなってゆきます。

年長児に年中児も交っているクラスですが、一人が四役程をいたしますので、舞台裏での衣装の着がえなども、全部一人ですということ、耳をすまして、舞台の動きを聞くということ、出番が来たら自分で出て来るなど、各自が主体性をもち助け合つてこの劇にのぞみますので、結果として子供達一人一人が、自信に満ちた輝やくような表情をしております。所要時間は一時間と二〇分程で、舞台は非常に広く、舞台裏での静肅をまもる約

束など大変です。

でもお母さま方に見て戴く日には、子供はまた一段と成長して、しっかりと活動を展開しています。

この日は、ただこの劇だけに終始するのではなく、その前に、卒業感謝礼拝を行ないます。

その礼拝の為に、前日は聖堂の掃除を子供達と一緒にいたします。この聖堂は、檜ひのきで出来た、明かるい暖かな日本建築で、広い聖堂の雑巾がけは、子供達の楽しみにしていることの一つです。自分の隣りにお母さんが坐る、そのために祈禱書や聖歌を揃える。そのような準備もあつての親子礼拝ですから、子供達はお客様として家族を迎え、礼拝の間も、むしろ子供達がリードして、聖公会の礼拝を進めてゆきます。

また、その日は講師をお招きしてお話を伺うのですが、子供達には、特別なことではなく、大変ゆつたりとした気分で、教会の椅子にこちよげに腰かけて、お話を聞いています。

そうした礼拝のあと、ひき続き子供達は、それぞれの位置につき劇をしてお母さんを感動の世界に伴って行くの

です。大仕事の済んだあとの昼食は毎年、格別においしく感じられます。グループで食卓を整え、お母さんと共に席につき、食前の感謝のお祈りも、準備の出来たグループから、順次にはじめて「ごちそうさま」まで、そのグループの活動が続きます。

昼食のあと、子供達はそれぞれに楽しい遊びにおやつまでを過ごしますが、お母さん達は、続いて作業をいたします。

宣教師館の一室にこもって、保母の声を聞きながら、聖書のあちらこちらに線引きをしてゆくのです。それは、子供達の愛誦聖句とでも申しませうか。「光の子らしく歩きなさい」や「互いに愛し合いなさい」と入園当初覚えたみことばからずっと、卒業する日まで、子供達が口ずさんで来た沢山のみことば、そこに赤い線をつけてゆくのです。

マタイによる福音書のヨセフの話からヨハネ黙示録まで、相当なスピードで朗読して、二時間はかかる線引きです。「ああ、これはここにあったのか」とか「聖書をはじめから終りまで見たのは、はじめて」とか、その時

間が進行するにつれて熱気が感じられます。

この聖書は、聖書協会から出されている一番安価な新約で、一冊一冊、母親の手に暖められて、尊い記念品となります。そして卒業式で、この聖書を贈られるわけですが、それはもはやどこにもない、貴重な新約聖書です。

お母さん方と線引きをしたあと、一緒に「主の祈り」を捧げる時、魂の最も深い所にひびきわたるよろこびを経験いたします。

保育室から「たそがれの空暮れてゆきて 花も小鳥も眠るなり 天っ使いのつばさにて われらの眠りまもりませ 父、子、みたまのわが神に 世々限りなく栄えあれ、アーメン」と帰宅の前の聖歌が流れ、感動を胸に、帰つてゆく母子を見送り、卒業式までの残る一週間の生活に、最善を尽くしてゆけることを祈るのです。

(上田市・聖ミカエル保育園)